

絵を見る機会

17世紀オランダにおける一般に開かれた展示の諸相

尾道大学 深谷訓子

17世紀のオランダは、絵画取引の重点が注文制作から美術市場に移行した時代・地域として知られ、またそうした市場向けの作品制作がジャンルの専門分化をもたらしたということも頻りに指摘されている。その一方で、(もちろん個々の事例の報告や美術市場に関する研究はなされているが) この取引形態を支える「商品としての作品を目にする機会」の全体像、およびその他の鑑賞体験に関する理解はいまだ十分とはいえない。教会という最も身近な公共の場から絵画作品がほとんど撤去されてしまっていた状況にあって、一般に開かれた「絵を見る機会」としては如何なる選択肢があり、どのような作品がどこで公に展示され、人々はそれらに如何に反応していたのであろうか。

展示という言葉で呼びうる諸現象のうち、まず見ておきたいのは、「売買のための展示」と「富くじの際の賞品の展示」である。美術市場の発展と、売買のための展示とは不可分の関係にあり、これら2つの展示は、最も広く流布していた形態だといえよう。くじを無許可で主催した画家が市から罰せられた事例なども知られている。個々の芸術家、もしくは芸術愛好家が散発的に行なった「展示」についても紹介し、検討を加えることにする。

また、ギルドが主体となって行なわれた展示活動も幾つか知られている。ここでは、主にユトレヒトとハーグの例を検討する。1640年前後には、ユトレヒトの画家ギルドがアフニテン修道院教会の一室を市当局から借用して、常設的な性格の強い展示を開始している。またハーグの画家たちによる芸術家団体「ピクトゥーラ」は、1656年の設立直後から、本部の置かれた建物の部屋に絵画を展示するというを行なっている。この2例は既にコッホやフレルケなどの先行研究でも扱われているが、ユトレヒトの画家ギルドでこうした試みがなされた背景については、これまで踏み込んだ研究がなされていない。本発表ではユトレヒトという土地柄や、ローマのアッカデミア・ディ・サン・ルーカにおける展示などとの関連から、絵画芸術のプロモーションとギルドの展示ということを改めて検討してみたい。

最後に、展示という観点からはこれまで等閑視されてきた修辞愛好家団体の活動を紹介する。イタリアの事例を扱った展示研究では、祝祭時のアップラートなども考察の対象となり、興味深い指摘がなされている。それに対して修辞愛好家団体の紋章盾(板に油彩で制作)のコンクールや行列行進は、観衆の数という点では当時のオランダで無比の機会であったにもかかわらず、これまでに展示・鑑賞という側面に着目した研究はなされていない。紋章盾に限らず、「活人画」や炎の光を利用したつかの間の展示など、修辞愛好家団体の競演会は、ネーデルラントにおける「祝祭的な展示」の一章をなすに相応しい、興味深い活動分野をいくつか含んでいる。発表では、その紹介と意義の検討などを行なったうえで、オランダにおける展示の諸相を振り返り、他国と比較してのその特殊性を浮き彫りにすることを試みる。